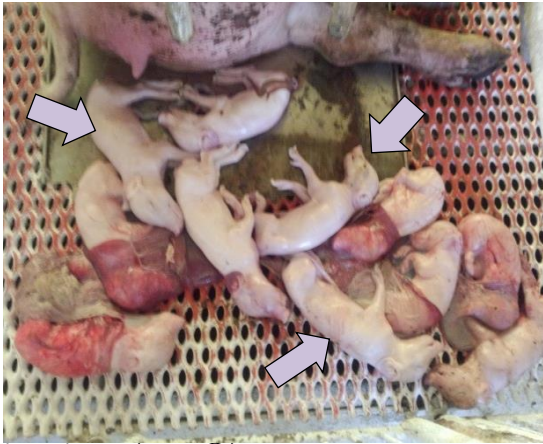


目的	流産の原因を調査する		
材料	<ul style="list-style-type: none"> ・採血道具 ・採材用ビニール袋 		
手順	<ol style="list-style-type: none"> ①発症母豚の血液を採取する ②流産胎児もしくは同腹の虚弱豚を採取する ③速やかに検査機関へ冷蔵で送付する 		
採材時の注意	<ul style="list-style-type: none"> ・母豚血液：流産発生日～翌日が望ましい。 ※流産前に食滞、発熱等の発症があった場合、症状から少なくとも1週間未満 ・流産胎子または虚弱豚（虚弱豚の方が望ましい）： ※複数頭（5頭程度）の検査を実施。解剖せず、できるだけ新鮮な検体を丸ごと冷蔵で送付。 →検査施設では、消化管以外の臓器すべてを1検体としてPRRS-PCRを実施。 検体プールする場合、腹ごとに行う。 		
検査	PCR法	いずれか陽性	<ol style="list-style-type: none"> ①PRRSが原因のひとつとして濃厚 ②類症鑑別も実施(パルボウイルス、レプトスピラ、日本脳炎、AD、インフルエンザ、豚丹毒など)
		すべて陰性	<ol style="list-style-type: none"> ①他の疾病の確認(パルボウイルス、レプトスピラ、日本脳炎、AD、インフルエンザ、豚丹毒など) ②3-4週後に母豚の抗体価上昇を確認（ペア血清） →母豚の抗体価上昇認められればPRRSが原因の可能性あり
備考	<p>【PRRSを疑う予備知識】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・流産発生前の母豚の症状として、食滞・発熱等が発生 ・流産発生時期は、妊娠後期が一般的 <p>【確認事項】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・発生した産歴に偏りがあるかどうかを確認 ・他の疾病の発生状況、各種ワクチン（日本脳炎、パルボウイルス、PRRS等）の投与状況を確認 ・上述の検査がすべて陰性でもPRRSを完全に除外することはできないため、哺乳子豚のPRRS-PCR検査による確認を推奨 		
改訂：2018年4月14日			
©P-JET			

流産検査（参考写真）



参考写真1（手順③）

流産胎子。検体として適切なものは矢印

準備中

参考写真2（手順④）

検体の送付は冷蔵とし、中には保冷剤を入れる

※写真の無断転載を禁止します